

「貧困と福祉の経済思想」

組織者：渡會勝義（早稲田大学）

新村 聡（岡山大学）

小峯 敦（龍谷大学）

1970 年代末以降、いわゆる福祉国家の危機と新自由主義 Neo-Liberalism による福祉国家批判のもとで、新しい福祉国家または福祉社会を探究するさまざまな思想的・実践的試みがなされてきた。これを背景として、福祉の思想と制度の歴史的研究の分野でも世界的に再評価と見直しが進み、本学会でも、近年、若手研究者を中心として福祉に関連する研究テーマが取り上げられことが多くなっている。

そこでこの共通論題では、「貧困と福祉という視角から経済思想の歴史を再検討する」ことを基本テーマとして設定した。主たる対象は、18 世紀後半から 20 世紀前半のイギリス思想であり、これとドイツ思想との対比も行う。

テーマとして「福祉」だけでなく「貧困」を掲げたのは、19 世紀後半から 20 世紀にかけてのいわゆる福祉国家思想史だけに視野を限定せず、重商主義以来の広い経済学史的パースペクティブの中で貧困と福祉をめぐる思想的・理論的展開を捉え直すという意図に基づいている。経済学の歴史では、「福祉 welfare、well-being」だけでなく、「富 wealth」「富裕 opulence」「効用 utility」などさまざまな用語によって福祉の問題（望ましい社会のあり方）が論じられてきた。しかしいずれの論者も「貧困 poverty」を解決すべき主要問題として認識しており、経済学の長い歴史における主題の連続性と共通性を明確に表現するためには、テーマに「貧困」を入れることが適切と判断した。

各報告はそれぞれ固有の課題と対象を持つが、議論が拡散しないように、以下の共通論点になるべく配慮することとした。

(1) 貧困とは何か？福祉とは何か？——各思想家は貧困の本質をどのように認識したか（低所得、低消費水準、必要の不十分な充足、自由の欠如、社会的排除など）。また、貧困を克服して実現されるべき福祉・富裕の本質とは何か。どのような社会が実現されるべきか。

(2) 貧困の原因は何か？——各思想家は貧困の原因（直接・間接）をどのように認識したか（清貧[貧困の理想視]、低賃金、怠惰、過剰人口、労働無能力[児童・疾病・障害・高齢など]、失業、無貯蓄、資産所有の不平等、その他の人間の性質および社会の環境）。

(3) とるべき貧困対策は何か？——各思想家はどのような貧困対策を提唱したか（労働強制、人口制限、資本蓄積、民間慈善活動、民間互助組織[友愛組合など]、国家扶助、社会保険、児童手当、最低賃金制、職業紹介、公共事業、貯蓄奨励、資産所有の平等化など）。それを支える思想・価値観はどのようなものか（キリスト教精神、博愛、温情主義、相互扶助[互助]、功利主義、社会主義、生存権・社会権、積極的自由など）。

(4) どのような対立また転換があったか？——それぞれの時代や国に、貧困と福祉の問題をめぐってどのような対立または転換があったか。たとえば、貧困は個人の責任か社会の責任かという対立など。

(5) どのような共通認識があったか？——異なる時代や国の思想家たちに、貧困と福祉の問

題についてどのような類似または共通する認識があったか。その理由は何か。